

『不思議な導きを経験する』 マタイ1:1-12

2:1 イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、

2:2 「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。

2:3 ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。

2:4 そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いただした。

2:5 彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしてしています、

2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。

2:7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き、

2:8 彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拝みに行くから」。

2:9 彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。

2:10 彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。

2:11 そして、家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。

2:12 そして、夢でヘロデのところへ帰るとのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った。

●序論

今日、この一年の歩みを振り返って、神さまの恵みと導きがあったことを感謝することは大切。そう思われます。

ある人は、人生の新しい第一歩、新しい住まい、病の経験とともに、命の行く先を考えた人。ある人は、祈ってもらい、祈って差し上げる経験をした人…などなど。

そのすべての中で、わたしたちクリスチャンは祈り、また祈っていただくことで、神さまの恵みの中を歩んできたことと思います。

大切なことは、すべてが神さまの不思議な御手の中にあったことを想い、「ああ、わたしは導かれてここまで来ることができた」と感謝することができるということです。そういう心の応答のかたちが問われます。

イエスさまの誕生をめぐる三人の博士たちや、周囲の人たちの心とその心の形が描かれています。そして私たちの心も探られるのではないのでしょうか。

●本論

I. 求めて出ていく経験

以前にお話ししたことですが、このマタイによる福音書は、旧約聖書の世界に生きるユダヤ人に向けて、イエスさまこそ、聖書が長年繰り返し預言し約束してきたメシア（キリスト）であることを示すためにまとめられたものでした。

そうわかって読み始めると、このマタイによる福音書は責めた文章かもしれません。冒頭、「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図」(1)と記して、キリストが正当なダビデ王の家系であることを示すものですが、一方そこには、異邦人や罪や過ちの出来事を思い起こさせるような人も連ねている。

それを読んだユダヤ人たちは、もしかしたら抵抗を感じたかもしれません。それでも、そこからイエスさまは聖書が語る救い主と証言していくのです。

さらに今日、2章冒頭から登場する「東からきた博士たち」は、おそらくバビロン・ペルシャと国々が立った地域、現在のイランのあたりから訪れた異邦人の天文学者、または占星術の学者たちではなかったか…とされています。

だから先ほども申し上げました、マタイは責めた書き方をしています。

ユダヤ人ではない、異邦人の東の博士たちが、ユダヤ人の王、つまり救い主の誕生に気づき、はるか旅をして、ユダヤまで旅してきたことを記録しているのです。

2:1-2 見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。

そして、そこにはヘロデ王とともにエルサレムの人々の反応も記されています。

2:3 ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。

ヘロデ王の反応は、ある意味自分の地位を脅かす存在の誕生を聞かされた当然の反応かも知れませんが、エルサレムの人たちも同様に「不安を感じた」のです。

彼らは、天を見上げることも、神さまを求めることも、救い主を求めることから離れ、自分の今を変えられることを恐れたのです。

救い主キリストを迎えることで何かが変わる、変えられてしまう。そうしたら今自分の自分の手にしている者はどうなるのか？

あらためて、マタイは責めた書き方をしています。この異邦人の方が先に救い主の誕生に気づくばかりか、それに応答して求めて出てくる人たちであった…ということの事実を示し、そうして、ユダヤ人たちに向けてこの方こそ救い主であることを「福音」として示しているからです。

II. 御言葉の経験

2:4 そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはど

ここに生れるのかと、彼らに問いただした。

博士たちの言葉に、ヘロデは、ユダヤの知識人、宗教学者の全員を集めたということでした。…で、彼らはなんと回答したか、もしかしたら即答であったのかもしれませんが。彼らは、聖書の預言の言葉を証拠として提示したのです。

2:5-6 彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしてしています、『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。

「預言者たちはこうしてしています」という、この証言は重要です。わたしたちは改めて知らなければならぬのは、これほど力強い証言はなく、またこれほど耳を傾けるべき言葉はありません。なぜなら聖書が語っているからです。

昔、大伝道者と言われたビリーグラハムが繰り返して用いたフレーズは、「BIBLE Says!」「聖書はこう言っている!」という言葉でした。

ヘロデ王のもとに集まった知識人、宗教家たちは、はっきりと聖書を答えることができませんでした。けれども、その心は応答していなかったことがわかります。

彼らの誰一人、応答していなかった…からです。

聖書のことばに、”福音”に応答する心こそ幸いです。

今年1月、最初に取り上げた御言葉はこうでした。

マタイ13:23 また、良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。

御言葉を経験する、そういう”心”、そういう心のかたちでありたいと願います。

このあと、また東の博士たちの姿を見ると、彼らの心のかたちがわかります。

2:9 …見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。

2:10 彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。

誰よりも、聖書の御言葉にすなおに聞き、そして信じて応答する、だからこそ、彼らはその星を見て「非常な喜びにあふれた」のです。

Ⅲ. 真実な礼拝の体験

彼らがエルサレムに着いて、自分たちの来た理由と目的をこう告げました。

2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。

彼らはそのかたを拝むために来たとあります。そして今、その目的が成就しました。

2:11 そして、家には行って、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏

して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。

そこにささげものを持ってきた。いろいろな解説がなれます。それが普通ではありえないほど高価な捧げものであったこと、またそれが、この幼な子イエスさまのちに経験する十字架の受難と葬りをも象徴するものとも言われます。

その捧げものの意味も大切ですが、ささげる人たちの心とその姿に今は注目しましょう。

「母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、…」
幼な子に対して「ひれ伏して拝む」ほどの”礼拝をささげる”姿は、驚きに見えます。

いや、そういう風に見ているわたし自身の心が問われます。お前はどうするんだ…と。

あの東の博士たちは、目の前の普通の貧しいお宅の小さな赤ちゃんをみて、それでも彼らは、自分たちが受けた導きと、語られたみ言葉の確信によって、ひれ伏したのです。

この方こそ救い主であると。ここに信仰があります。

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。(ヘブル11:1)

3人の博士たちは、その目に見えるこの幼な子に、まだ見ていない救いのわざの成就を見たのです。

○さいごに

この東の博士たちを導いたのは、神さまだとわかります。

東の博士たちに気づきを与えたことはユダヤ人たちにとって不思議だったでしょう。かつてバビロン捕囚の中、彼らとその地に残した信仰と御言葉の種が、不思議とその地の人々の学びに、心にとどまっていた不思議がありました。

それが、東の博士たちが、星を見いだすきっかけとなったのです。

さらに、エルサレムの人たちが聖書を知りながらも、だれも応答せず、ただ不安を感じた、いや後に殺意につながった…という経緯の不思議があります。

そのすべてが十字架につながりました。けれどもその受難を通してすべての人の罪の贖いが成し遂げられたという不思議です。

英語で不思議は「Wonder」と言います。そしてその不思議が満ち溢れると

「Wonderful」つまり素晴らしい経験に結ばれるというのです。

ただそこに、開かれた心があるならば…。マタイがユダヤ人に向けまとめたこの物語は、また今を生きるわたしたちの心をも問う、そういう物語ではないでしょうか。